孫子を読む

「孫子」の著者は春秋時代の孫武との説と、戦国時代の孫臏であるとの説がある。

いずれにせよ紀元前の人である。今から二千年以上前の書物である。その、伝承過程で様々な異説もはいっている事も考えられるが、世界最古の兵法書である。

そもそも、このような書物をつくり、さらに伝承してきたという中国人の思想は驚くべきものであると思う。特定の権力者や宗教的バックがあるわけではない。

世界の西ではギリシャ人ヘロドトスにより世界最古の歴史書といわれる「歴史」が書かれている。これもほぼ同時期の紀元前四、五世紀の事である。

実は両書とも書かれているものは戦争の事である。「歴史」が戦争の事実を記述しているのに対し、「孫子」は戦争の原理を記述している。この辺もギリシャ人と中国人の違いが分かって面白い。

日本でも昔から「孫子」は愛読されている。有名なのは武田信玄の旗印「風林火山」だ。これは、孫子の軍争篇第七にある。

「其の疾きことは風の如く、其の徐かなることは林の如く、侵掠することは火の如く、動かざること山の如く」

この前段は「兵は詐を以て立ち、利を以て動き、分合を以て変を為すものなり」とあり、「故に」「其の疾きこと・・・」と続くのである。つまり、戦争は敵の意表をついて決起し、利益を求めて動き、集合分散を繰り返し同じ形で固定しない。そのため、風のように速く、林のように静かに、火のように敵地を侵し、山のように動かず・・・これが戦争の法則であると述べている。

また、メーカーの積水化学の社名も「孫子」からきている。「積水の千尋の谷に決するがごときものは形なり」（形篇第四）

余談ではあるが、私はこの言葉で新潟県の妙高山の麓にある「苗名滝」を連想する。この滝は巨大な逆Ω形をしていて孫子の言葉が納得いく。私も山好きで多くの滝を見ているつもりだがこんな滝はなかなかない。

おそらく、積水化学の創業者が孫子を好きだったのだろう。現代の経営者の中にも、孫子ファンは多いようだ。

「孫子」を貫く思想は「戦わずして勝つ」ということだ。もし戦わなければならない場合も最小限の戦いを勧めている。

「凡そ用兵の法は、国を全うするを上となし、国を破るはこれに次ぐ。軍を全うするを上となし、軍を破るはこれに次ぐ」（謀攻篇第三）

戦争では相手の国を無傷で取ることが上策であり、これを撃破することは次の手段となる。敵軍もまた同じ。

「兵は勝つ事を尊ぶ。久しきを尊ばず」（作戦篇第二）

軍隊は勝つために戦い、勝敗がつかず長引く事は避けなければならない。

つまり、「孫子」ではいかに戦いに勝つのかという事を記述している。その意味で一切の観念を排し、リアリズムの立場に立っている。これが二千年以上も

代表取締役社長
鈴木英介



人々から読み継がれ、現代でも全く古さを感じない理由だろう。そればかりではなく、兵書ではあるが、政治の書としても経済の書としても読める。当時は現代以上に、政治と軍事と経済は密接不可分なものであったと思う。その意味で科学的真理の書と言ってもよい。

では、どのようにすれば戦争に勝つ事ができるのだろうか。

「彼を知り己を知れば、百戦して危うからず」（謀攻篇第三）

相手の力を知り、自らの実力を知っていれば百戦しても負けることはない。当たり前のようではあるが、古今東西、現実にはそうしない者が多いのだ。続いて「彼を知らず己を知れば、一勝一敗す。彼を知らず己を知らざれば、戦うごとに危し」

なぜならば、「善く戦う者は勝ち易きを勝つ者なり」（形篇第四）彼我の力関係を知り、勝てる戦いだけをするので勝つわけである。「故に善く戦う者の勝つや、奇勝無く、智名も無く、勇功も無し」計算して勝てる戦いで確実に勝つわけであるから、奇蹟も、卓越した知恵も、豪勇もそこにはないと言う。

「この故に勝兵は先ず勝ちてしかる後に戦いを求め、敗兵は先ず戦いてしかる後に勝ちを求む」勝負はやってみなければ分からないなどという事はないのである。分からないのなら「戦うごとに危し」と言う。

そもそも戦争の原理とは「算多きは勝ち、算少なきは勝たず。而るをいわんや算無きにおいておや」（計篇第一）

開戦前に机上で計算し勝てるものが勝つのであり、計算上負けるものは勝たない。ましてや計算もしない者が勝つはずはないではないか。

作戦シュミレーションは大昔からあったわけである。ここでは「廟算」という言葉で言っている。

孫子は一切の精神論を排する。戦争は科学であり、計算であるとの立場を貫く。なぜなら「兵は国の大事なり、死生の地、存亡の道、察せざるべからざるなり。」（計篇第一）戦争は国の大事である。国民の生死、国家の存亡を賭けるわけであるから熟慮しなければならない。これは「孫子」冒頭の言葉である。太平洋戦争の開戦に踏み切った日本のかつての指導者に聞かせたい言葉だ。

そして、最後にどのように計算し、察するのかを述べている。

「人に勝ち、成功の衆に出ずる所以の者は先知なり、先知なるものは鬼神にとるべからず、事に象るべからず、度に験するべからず。必ず人に取りて敵の情を知る者なり。」（用間篇第十三）

戦争の勝利、作戦の成功は情報による。情報は神様に願ったり、他の事柄から類推したり、暦で占ったりするものではなく、必ず人を直接派遣して敵情を実地調査する事によって知ることができる。

「惟だ明主賢将のみ能く上智を以て間者となして、必ず大功を成す。これ兵の要にして三軍の恃みて動く所なり。」（用間篇第十三）

優れたリーダーだけが優秀な部下を情報収集にあたらせて成功する。これが軍事の要であり、全軍の行動の依拠するところである。

（「孫子」は岩波文庫版によった）